



優れた記憶の想起プロセスについての一考察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-05-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川部, 哲也 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017388

優れた記憶の想起プロセスについての一考察

川部 哲也

1. 問題

本研究の出発点は、自閉症スペクトラム障害（以下 ASD と表記）における「優れた記憶」についての探究であった。「優れた記憶」については、Kanner(1943/1978)の論文に既に記載があり、自閉症児ドナルドが2歳にして「詩篇の第23篇と長老教会の問答集の23の問答さえ覚えた」とある。このような「優れた記憶」は昆虫博士や鉄道博士という形をとることもあり、現在も「巨大データベース」のような膨大な機械的記憶を持っていることはASDの特徴であると考えられている（松本, 2019）。その優れた記憶のメカニズムを知ることにより、ASDの人が生きている体験世界を理解したい、と筆者は考えた。筆者はまず東田直樹の手記を手掛かりに、ASDに特徴的な記憶のあり方を描き出すことを試みた（川部, 2018）。1) 「点」の記憶, 2) 場面の映像としての記憶, 3) 無時間的な記憶, 4) 居場所としての記憶, 5) 記憶の受動性という5つの特徴が抽出され、ASDの人の記憶の一端を明らかにすることができた。一方で、その5つの特徴が「ASDに特有」といえるのかどうかは、今後の課題として残された。次に取り組むべきは、比較対象となる定型発達者の人の記憶の仕組みを検討することであった。

川部（2020）では、定型発達と想定される一般の大学生を対象に、「優れた記憶」について探索的に質問紙調査を実施した。結果、定型発達者の典型的な「優れた記憶」は、曲名、芸能人名、キャラクター名、地名、専門用語名の5つのカテゴリーであることがわかり、多種多様な「優れた記憶」が存在することが示された。その際、AQを用いてASD的な認知様式を有する程度と「優れた記憶」との関係調べたが、ASD的な認知様式を多く持つ人は、そうでない人よりも「専門用語」「食物名」「マンガのタイトル」についての「優れた記憶」を持っている傾向が見られた他は、大部分の変数において明らかな差が見られなかった。この結果は、大まかに言うならば、ASD的な認知様式を有していようとまいと、「優れた記憶」の量的側面には大きな差がないと考えられる。言い方を変えると、定型発達の人にもASDの人が持つと同等の「優れた記憶」がある可能性が示されたともいえる。本研究はそのような問題意識のもと、定型発達の人の中にあ

る「優れた記憶」を詳細に見ていきたいと考えた。

川部（2020）の質問紙調査において、はっきりした結果が得られなかった原因は「優れた記憶」の量的側面に注目したためであろう。すなわち「何を何個知っているか」という量的側面は、「優れた記憶」の特徴をつかむのに適した切り口ではなかったと考えられる。むしろ記録時や想起時にどのような心的プロセスを経ているのか、それは通常の記憶のものとは質的に異なるのか、といった質的側面に目を向ける必要があっただろう。従って、本研究では面接調査によりデータを収集し、質的分析を行うことにより、その想起プロセスの様相を明らかにすることを目的とする。なお、今回は定型発達者の一般的傾向を検討したいため、川部（2020）と同様に一般の大学生を調査対象とした。

2. 目的

「優れた記憶」の想起プロセスを質的分析によって描き出すことが本研究の目的である。なお、今回の調査対象者は定型発達者であると想定されている大学生であり、一般的傾向を明らかにすることが目的である。

3. 方法

調査対象者；A大学の大学生11名（男性4名、女性7名）、平均年齢19.5歳（標準偏差1.3）。

調査時期：2018年3月から2019年2月。

調査場所：筆者の所属機関における研究室にて実施した。

面接調査の手続き；A大学において授業時間の終わりに質問紙調査を実施し、その中で面接調査参加者を募った。年齢、性別、学部が偏らないよう調整を行い、調査対象者を選抜した。調査として質問項目を設定した半構造化面接を実施した。調査開始に先立って、研究の目的・倫理的配慮・調査内容の説明を書面および口頭で行った。同意が得られた場合に同意書に署名してもらい、調査を開始した。面接調査における質問は、「優れた記憶」の内容、それが想起されるプロセス、多く覚えるに至ったエピソードを中心に構成した。具体的な質問項目は表1に示した。

表1 面接調査の質問項目

・「優れた記憶」の内容（実際にいくつか想起してもらう）
・想起時にどのような方略を用いたか
・想起時の意識状態，イメージの生起，感情の生起について
・多く記録することになった経緯
・「優れた記憶」によって良いこと，悪いことはあったか

分析方法としては，得られたデータを逐語録に書き起こし，修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下，M-GTAと表記）（木下，2003）を用いた。本研究の分析テーマは「優れた記憶の想起プロセス」を明らかにすることであるため，プロセスを解明するのに適したM-GTAを分析方法として採用した。M-GTAにおいては，理論的サンプリングを行うため分析焦点者の設定が重視されているが，本研究では事前に質問紙調査を行うことにより，「優れた記憶」を有している大学生を分析焦点者として選定できていると考えられた。「優れた記憶」の大部分を占める曲名，芸能人名，キャラクター名を含んでおり，人より多く知っている自信の程度や想起の仕方のバリエーションが豊富になるように，調査対象者は最低でも10名必要と考えられた。本研究では11名の面接調査を実施し，実際に「優れた記憶」の想起プロセスについて豊富なデータを収集することができた。分析経過において各概念生成が理論的飽和に達したと判断できたため，この時点で面接調査とデータ分析を終了した。

なお，本研究は大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科研究倫理審査委員会の承認（2018年2月1日承認）を得て実施した。

4. 結果

面接調査によって得られた11名の「優れた記憶」を表2に示した。曲名，芸能人名，キャラクター名といった典型的な「優れた記憶」が含まれており，想起のされ方もバリエーション豊かな結果となった。M-GTAによって分析を行った結果，概念は15個，カテゴリーは4個生成された（表3）。（以下，【 】はカテゴリー，[]は概念を表す。）

カテゴリー相互の関係としては，まず【優れた記憶の形成】が前提としてあり，それが想起される際に通常の記憶とは異なる【特殊な想起プロセス】が生じる。その結果として，【想起時の感情】と【優れた記憶をめぐる困難】が浮かび上がると考えられた。以下，関連図（図1）を基に各カテゴリーと各概念について説明する。

(1) 優れた記憶の形成

第1のカテゴリーは【優れた記憶の形成】に関わるものであり，5つの概念から構成されている。両親や兄弟，友人や同じ部活・サークルの人など「身近な人からの影響」がきっかけで，ある対象と出会う。多くの場合，その対象に興味を持ち，「好きなもの」になっていく。熱中や没頭を伴い，その対象に頻繁に接することにより，その対象に「なじんだ経験」が形成される。その経験は，人によっては一時的なものとして終わるが，現在までずっとなじんでいる人もいる。また，その対象は強く印象に残るものであったり，興味のおもむくままに掘り下げて積極的に調べるなどしたりして，「深いレベルの記録」がなされていると考えられる。「優れた記憶」の形成にあたっては，ほとんど全員が「意図せずに自然に覚えた」という。すなわち，

表2 調査対象者の優れた記憶

対象者	優れた記憶内容	記憶した時期	きっかけ	想起されるもの	想起時の感情
A	芸人のコンビ名	物心ついた時からずっと	テレビで観て	ネタの一連の映像	面白い
B	b(アニメ)に登場する機体	中学生	ゲーム，雑誌	戦闘シーンのイメージ	(思い出せなくて) 焦り
C	c(マンガ)のキャラクター	小学生から高校	兄のマンガを読んで	キャラクターの顔と背景の映像	特になし
D	マンガのタイトル	中学生からずっと	親のマンガを読んで	タイトルの文字	特になし
E	e(アーティスト)の曲名	高校2年からずっと	後輩からCDを借りて	曲名の語感	特になし
F	日本の大学名	受験生のとき	ネットで調べていて	情報サイトの画面	特になし
G	小学1年で習う漢字	幼稚園年長	漢字一覧表を見て	漢字の「音」	特になし
H	h(アーティスト)の曲名	2年前からずっと	カラオケで聞いて	アルバムのジャケットの絵	楽しい
I	i(ゲーム)のキャラクター	幼稚園からずっと	ゲーム	ゲームのプレイ画面	ゲームをしなくなった
J	j(映画シリーズ)の登場人物	小学5,6年からずっと	テレビ，映画	映画の映像	特になし
K	k(劇団)の俳優名	高校3年からずっと	舞台を観て	舞台の映像	楽しい

表3 生成したカテゴリと概念, 具体例

カテゴリ	概念	具体例
優れた記憶の形成	身近な人からの影響	お兄ちゃんのハマってるものに、自分も真似してハマって。(Cさん)
	好きなもの	<なぜたくさん覚えた?>もう、好きだからっていう一点ですかね。(Kさん)
	なじんだ経験	えっと何歳からやろ?幼稚園くらいから今までずっと全部やって。(Iさん)
	深いレベルの記録	癖が強すぎて、別に面白くもないのになんか(覚えてしまった)。(Aさん)
	意図せずに自然に覚えた	初めは志望大学とか、受験サイトとか見てて、なるほどなと思ってある程度調べると、ほかに大学何があんのかなと思って、それで調べていくうちに、自然と(覚えた)。(Fさん)
特殊な想起プロセス	映像が思い浮かぶ臨場感のある想起	私昨日、観劇に行っていたので、その場面とかを思い出しながら、ここで台詞を言ってた方とかをぼっぼっぼっと言ったりとかは、しましたね。<何が思い浮かんでいた?>舞台の映像ですね。(中略) その中で、ある場面で踊ってた人の学年が上な順から言っていくんですけど。(Kさん)
	音やリズムなどを身体で覚えている	(小学1年の漢字を)音で全部覚えてて。それを口に出したら、たぶんばーって全部言えるんですけど、なんかちょっと(書くのは難しかった)。(Gさん)
	流れが想起される	(登場人物の)順番に過去とかの話もしていくじゃないですか。ストーリーの流れとかで。そこでちょっとずつ、ぱっと出てきた人を引っ張り出して(思い出した)。(Cさん)
	テキストデータの想起	<タイトルを想起する時に映像などとセットで出てくるか?>一緒に出てくることはあるんですけど、とにかく数を言おうモードの時は、とにかく文字だけ(想起される)。(中略) ぱっと出てくるやつは、本当にパソコンのフォント的なので。(Dさん)
	関連で思い出していく	このマップ、何が出てきたのかなあっていうのを思い返して。(Iさん)
想起時の感情	無意図的かつ受動的想起	(努力して思い出しているのではなく)自然と、ふわっと来るのを待つ。雲がたくさんあって、そこを進んでいったらこう、映像が両方の雲に流れてて。雰囲気的に。ふわっ、ふわっ通り過ぎていく映像がある感じ。(Jさん)
	特に感情はない	(思い出していて)感情は湧いてないですね、特には。(Jさん)
	楽しい	(思い出すのは)楽しいです。ライブの時も、この人たちCDそのままやるというのが全然なくて。(中略) どの曲が出てくるか、あまりわからないっていう感じなので、それを(今ここで)やってみた、みたいな。見えない宝箱の中って、何出てくるかなみたいな気分で、曲名を思い浮かべてました。(Hさん)
優れた記憶をめぐる困難	想起の困難さ	もう忘れつつあるんで。(中略) (最初はスムーズに思い出せていたが)最後に行くにつれて(思い出せなくなってきて)焦りが。(Bさん)
	他者と共有することの困難さ	こんなに通じる人めったにいないんです。自分だけしゃべりすぎて、えっ誰(の話題)? みたいになって。高校時代は、そんなに表に出してなかったです。(Aさん)

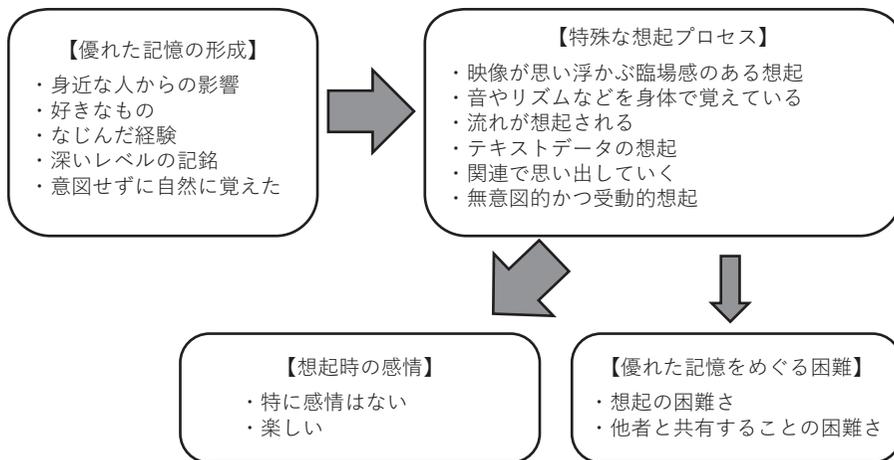


図1 優れた記憶の想起プロセスについてのカテゴリ関連図

覚えようと意識して覚えたのではなく、ふと気が付くと多く覚えていたという形をとる。これは、いわゆる勉強等における暗記とは別の感覚であり、どうして覚えているのか自分でも不思議と感じるものである。

(2) 特殊な想起プロセス

第2のカテゴリーは【特殊な想起プロセス】に関わるものであり、6つの概念から構成されている。優れた記憶が想起される時には、その想起され方にくつつかの特徴がある。例えば、ある場面やキャラクターが、過去の情景が映像としてそのままリアリティをもって想起される「映像が思い浮かぶ臨場感のある想起」が生じる場合がある。また、音やリズムで想起されるという、いわば身体にダイレクトに記憶が宿っているような「身体で覚えている」場合もある。他には、やや稀なケースではあったが、一つ想起されると流れによって次々と想起されていく「流れが想起される」場合や、文字がそのまま想起されるという「テキストデータの想起」の場合もあった。これらを【特殊な想起プロセス】と命名した理由は以下の通りである。この調査で問うた「優れた記憶」は、意味記憶の要素が強いと考えられる。例えば、日本の都道府県や元素記号を多く想起しようとする場合を想像してみると良いだろう。記号化された知識がただ無味乾燥の記号として想起されるのみである。しかし、本調査で語られた記憶はいずれも生き生きとした力動を有していたため、筆者はあえて【特殊な想起プロセス】と名付けたのである。これらの想起プロセスの様相については、後に考察する。

想起される際の手掛かりとしては、思い出するための基点を定めてそこから関連するものを想起しようとする「関連で思い出していく」方略が用いられる場合もあれば、意識的努力を全く放棄して、自然に思い浮かんでくるのを待つという「無意図的かつ受け身の想起」という方略が用いられる場合もあった。これらの概念にはそれぞれ、対極例も存在しており、関連を重視しないで想起する人や、意図的に努力して想起する人もいた。

(3) 想起時の感情

第3のカテゴリーは【想起時の感情】に関わるものであり、2つの概念から構成されている。多くの調査対象者は、想起時に「特に感情はない」と答えた一方、思い出すと「楽しい」という感情を味わう者もいた。前者は、ただ思い出すだけであって感情は伴わないという場合が大半であったが、中には思い出せなくて苦

しくて焦るなどの調査に対する感情を報告する人もいた。後者は、思い出すと自分が楽しいという場合や、過去の体験がありありと想起され、そのシーンに浸って楽しいという場合が報告された。感情の観点については、後に考察する。

(4) 優れた記憶をめぐる困難

第4のカテゴリーは【優れた記憶をめぐる困難】に関わるものであり、2つの概念から構成されている。調査対象者の中には、調査時にすぐ思い出せなかったり、過去の一時期にはよく接していたが現在はあまり接さなくなったものについての記憶が薄れていたりと「想起の困難さ」を体験する場合があった。また「他者と共有することの困難さ」も報告された。これは、優れた記憶の内容が珍しいものであり、人があまり知らないような知識であるがために、その話題を他者と共有しにくいと考える場合や、それとは反対に、世の中には自分よりもっと知識を持っている人がいるので、自分の知識はたいしたことがないという劣等感ゆえに、他者と共有しにくいと考える場合があった。いずれにせよ、優れた記憶を他者に披露することが難しいという人がいた（現に、この調査で生まれて初めてその知識を人に話したという人も何人かいた）。なお、この【優れた記憶をめぐる困難】に言及したのは調査対象者の半数であり、【想起時の感情】に比べて全員がたどり着くカテゴリーではない。ゆえに図における矢印が少し小さくなっている。

5. 考察

M-GTAの分析結果を受けつつ、各対象者の語りを加え、以下の点について考察を行う。

(1) 「優れた記憶」は自然に覚えたものである

11名中9名が「優れた記憶」は自然に覚えたという趣旨の発言をしている。残る2名も、明示的には語っていないが、頻繁に接しているうちに勝手に覚えたことが推測された。11名全員が意識的努力なしにこれだけの「優れた記憶」を形成したことは驚きである。まるで毎日出会う友人の名前を自然に覚えてしまうように、あるいは、まるで毎日通る道にある看板を自然に覚えてしまうように、日常生活を送る中で意識せずに記憶したような印象を受けた。それだけ彼らがその対象へ意図せず深く没入し、(当時の)自分の生活の重要な部分を占めていた(あるいは、今も占めている)ことが窺える。筆者は「優れた記憶」に耳を傾けるうちに、語り手がだんだん活き活きとしてくるとい

う現象に何度か出会った。「優れた記憶」の多くはその人の「好きなもの」であるから、生き活きしてくるのは当然のことかもしれないが、それ以外の要因も働いて、語りが湧き出てくるという感じを受けた。

(2) 「優れた記憶」には映像記憶が含まれている

興味深いことに、「優れた記憶」は必ずしもその人にとって好きなものとは限らない。調査対象者の大多数は、自分の好きなアーティストの曲名や好きなマンガのキャラクター名であるなど、好きなものを挙げたが、中には「日本の大学名」や「小学1年で習う漢字」など、その人が特に好んでいないのに、なぜか勝手に覚えてしまったというケースが見られた。これらはそれぞれ「サイトの画面」や「漢字一覧表」が想起されているため、視覚像がそのまま記憶として定着したものと推測される。

滝川 (2017) によると、知的障害や自閉症の子どもたちにはしばしば「記憶力の卓抜」さがあるという。高い感覚性と結びついた記憶能力であり、感覚したものを感覚したままに（視覚的なものなら写真的に）ナマに頭に焼きつける記憶のしかたで、「直感像記憶 eidetic memory」と呼ばれている。これは特殊な能力ではなく、乳児期には誰もが持っていた能力であり、一般には成長につれて後退していく能力なのであるが、まれに成人後もこの記憶能力を高く残している人がいると考えられている。今回の2つのケースで見られた「優れた記憶」は、まさにこの直感像記憶であると考えられ、定型発達者にも普通に見られることが示されたといえよう。

(3) 静止画の記憶と動画の記憶

映像記憶に関してもう一つ指摘しておきたいのは、静止画タイプと動画タイプの2種があることである。前述のサイトの画面と漢字一覧表は静止画に分類されるが、調査で想起されたAさんの「お笑い芸人のネタ」やKさんの「舞台での踊り」は、明らかに動画に相当すると考えられた。記憶の観点から考えるならば、この両者は質的に異なる記憶であると考えられる。なぜなら、静止画は文脈のない断片的な記憶であり、乳幼児期の原始的な感覚世界に近い記憶である一方、動画は一連の文脈がある物語的な記憶であり、発達的には言語習得後の秩序だった認知による記憶であると考えられ、両者は質的に異なると考えられる。しかし、11名の語りを聞いていて、筆者には両者の語られ方が同じトーンである印象を受けた。中には、静止画なのか動画なのか判別が難しいケースもあった。例えばBさ

んの語りは、アニメの戦闘シーンの「イメージ」が想起されるという。詳しく聞くと「関連して、こいつと戦ってたやつはこいつや」と思い出しついで、「仲間もこいつがおったときはこいつやった」と思い出すのだという。戦闘シーンと聞くと当初、筆者は動画の記憶であろうと考えたのであるが、Bさんの語りを聞いていると必ずしも具体的な戦闘シーンが想起されているのではなく、機体同士の関係やグループといった抽象的かつデータベース的なものが想起されていると感じられた。データベースは静止画である。このように、動画と静止画の境界は曖昧であるといえよう。別の例を挙げると、Aさんの記憶内容は確かに「芸人のネタ」という動画なのであるが、Aさんがあまりに多くの漫才をすぐに想起することに筆者が驚いてくどいな引き出しに入っているの?と尋ねると、「常に何かを観てるからじゃないですか。夜、寝る前にYouTube観ちゃうんですよ。眠いのにと、毎日動画を繰り返し視聴していることを教えてくれた。Aさんの場合も、記憶内容は動画であるが、YouTubeで視聴するのはデータベース的であると感ずる。現代は動画サイトなどで何度も繰り返し動画を視聴することが容易になっているため、デジタルメディア以前には存在した静止画と動画の間の差がほとんどなくなっている可能性がある。

(4) 身体に備わった「優れた記憶」

EさんとGさんの「優れた記憶」は、音やリズムによって構成されている。Eさんはあるアーティストの曲名を想起する際に、語呂で思い出すのだと語ってくれた。そして、曲は思い浮かぶが曲名がわからないとも語り、何事も耳で覚えるのだと説明してくれた。Gさんは、小学1年で習う漢字80個すべてを記憶しているが、想起する際にはすべて「音」で思い出すのだという。ゆえに、書くことはやや難しかったようで、口で言うならすらすら言えると教えてくれた。彼らの語りから筆者は「優れた記憶」は身体に刻み込まれる形でも存在していることを知った。アスリートが優れた身体運用を身につけると同様に、「優れた記憶」は身体に備わるといっても存在しうると考えられる。記憶の種類としては、手続き記憶に近いものと推測される。

一方、萩原 (2020) はASDにおける記憶想起に感覚的な鮮明さがあることに注目し、感覚記憶や短期記憶との関連を示唆している。ゆえに本研究の「優れた記憶」は、感覚記憶の生成を伴った手続き記憶、ということも可能かもしれない。検討は今後の課題である。

(5) 「優れた記憶」の想起にはほとんど感情を伴わない

今回の調査においては、優れた記憶を想起する際に、過去の感情がよみがえる現象がほとんど見られなかった。11名中6名(C,D,E,F,G,Jさん)が、想起時に感情は特にないと答えた。残る5名のうち3名(B,H,Iさん)は感情を語ったものの、それは過去の感情ではなく思い出す作業をしている「今」の感情であった。これはASDの人の場合と大きく異なる。東田は自著の中で、「過去の出来事については、昨日のことも1年前のことも、僕の中ではあまり変わりがありません(東田, 2010/2016;p111)」と語り、自身のフラッシュバックは、まさに過去のことを現在生じたこととして体験してしまうのだと説明する。このような事態を清水(2020)は、ASDにおいては過去がフラッシュバックのように鮮烈に想起されている時には「今現在の現実の知覚」と“過去の想起”とが同等となり「二つの現在」が生じていると論じている。筆者の臨床経験でも、ASDの人との面接中に過去の体験がありありとよみがえる場面に会うことが多い印象がある。このように、ASDの人にとっては、過去を再体験することは稀ではないが、定型発達者は当時の感情がよみがえるのではなく、「特に何も感情はない」という人が多いことが明らかになった。(なお、面接調査では「思い出すことに必死になった」「思い出せて達成感があった」「思い出せず焦った」などの感情が語られたが、それらは「思い出す作業」に対する現在の感情であって、過去の感情がよみがえったわけではない。)筆者にとって、それだけ「優れた記憶」を生き生きと語っていながらそこに「感情がない」と説明することは当初違和感があった。しかし考えてみると、このことは定型発達者にとっては、過去と現在ははっきりと区別されていることが示されていると考えられる。過去と現在は決して混同されないのが定型発達者のありようである。ゆえに、もしも過去と現在が混じり合うようなことがあれば、大きな驚きとなるのである。次の文章にはその驚きが如実に描かれている。

私は無意識に、お茶に浸してやわらかくなったひと切れのマドレーヌごと、ひと匙の紅茶をすくって口に持っていった。ところが、お菓子のかげらの混じったそのひと口のお茶が口の裏にふれたとたん、私は自分の内部で異常なことが進行しつつあるのに気づいて、びくっとしたのである。(中略)そのとき一気に、思い出があらわれた。(中略)今や家の庭にあるすべての花、スワン氏の庭

園の花、ヴィヴオンヌ川の麗蓮、善良な村人たちとそのささやかな住居、教会、全コンプレーとその周辺、これらすべてががっしりと形をなし、町も庭も、私の一杯のお茶からとび出してきたのだ。(ブルースト著、鈴木道彦訳『失われた時を求めて』第一篇 スワン家の方へ)

いわゆるブルースト現象(においと遭いを契機として、過去に経験した出来事があったかもそれを追体験しているかのようにありありと思い出されること)として知られる文章である。失われたと思っていた過去が、現在にこのように生き生きとよみがえる現象は、ブルーストにとってこの上ない驚きであったといえよう。しかし裏を返せば、ASDの人にとっては、このような現象は珍しいものではなく、過去と現在の区切りはとて薄いものであると考えられる。

(6) 本研究のまとめと今後の展望

本研究では、一般大学生の「優れた記憶」についての面接調査を通して「優れた記憶」想起においては、定型発達の人にも特殊な想起プロセスが生じると考えられることを示した。その現れは、映像記憶や身体に備わった記憶といった想起形式によく表れていたが、ASDの人に生じうるタイムスリップ現象やフラッシュバックと異なり、過去と現在の区別がしっかり保たれていた。しかし、ASDがスペクトラムであり、程度の差はあれ誰もが少しはASD特性を有していることを考慮に入れるならば、過去と現在を区別する境界の強度は人それぞれであると考えられる。過去の出来事がなかなか過去のことにならない現象や、現在と過去の境界が溶解する現象(デジャヴ体験はその一種と考えられる)の体験のされ方は、ASD特性と何らかの関連があるのかもしれない。

清水(2020)は、ASD者と定型発達者の「過去」の捉え方が異なるという仮説を提唱している。すなわち、定型発達者は自己の時間的連続性を信じている一方で、ASD者はそうならならず、過去の記憶は「私」不在のままバラバラの断片があるだけの「スクラップ置き場」のようになっているという。この仮説は、本研究で示したASDの人における現在と過去の境界の薄さという点について、自己の連続性のなさという別の角度から光を当てた論であると考えられる。この論の面白さは、誰もが自分の過去の記憶に忘却の穴があるにもかかわらず、定型発達者は自己の時間的連続性を持つがゆえにその穴を無根拠に埋めることができるのに対し、ASD者はその穴をそのま

ま不連続とみなすというところにある。すなわち、定型発達者の行いのほうが「無根拠」であり、ASD者のほうがありのままを捉えていると考えているのである。このように「まとまりを持ったひとつの私」という考え方（アイデンティティと呼んでも良い）そのものが、定型発達者が持っている錯覚ではないかと考えることもできる。その発想の逆転はASDの臨床に有用であると考えられる（ASDのクライアントは、しばしば自分の考えや感覚が間違っていると思いついて悩んでいるが、実は間違っていないことが多く、単に多数派の考えや感覚とは違っている「少数派の考え・感覚」であると考えられる）。

哲学においても、「過去とは何か」をめぐる時間論は難問として古くから議論されてきた。中島（1996）の論に従って哲学における時間論を概観すると、ベルクソンは過去の知覚や行為を想起する際に、時間が空間化されてしまい、現在の時間とは全く別のものに変わってしまっていると説明した。私たちが時間について語る時、常にそれは過去化された時間であり、空間化された時間なのである。では、過去とは何だろうか。知覚されたものが記憶痕跡となって、脳内のどこかにデータとして記録されているものなのだろうか。それに異議を唱えたのが大森莊蔵である。大森の論は、想起について重要な論考を行っており本論のテーマに関わるため、詳細に検討する必要があるが、紙数に限りがあるため別の機会に論じることにしたい。ここでは一点指摘するにとどめるが、大森は『時間と自我』（1992）の中で「想起とは過去経験の再現または再生である」という考えを「根本的な誤解」と断じている。その理由は、昨年の旅行で見た海の青さが今、眼に見えてはいないこと、昨年の歯の痛みが今、歯の痛みとして知覚されていないこと等を挙げる。筆者には、通常の記憶想起はこの見解で説明可能であるが、今回の調査で得られた「優れた記憶」の中の一部には過去の知覚と同様の知覚が（ごくわずかであるかもしれないが）現在にも生じているように感じられた（Aさんは芸人のネタを今観ているように語ったし、Kさんは舞台鑑賞を再体験しているように語った。ただしKさんの体験は昨日のものだったせいかもしれない）。定型発達者にこの心の動きがあるということは、ASDの人には、より過去と現在の区別を乗り越えて「タイムスリップ」（杉山, 2011）する可能性があるとして推測される。理論的に考えれば、ASDの人のその感覚はすべて「錯覚」や「幻想」と考えざるを得ない（過去と現在を混同することは通常は起こらないからである）が、ASDの人は独特なあり方で過去の記憶を現在体験している

可能性があると感じることがある。今後臨床経験を積み重ねるなかで、考え続けていきたい。

付記：面接調査に協力してくださった皆様に感謝します。本研究は2019年の日本心理臨床学会第38回大会にて発表した内容を加筆・修正したものです。また本研究は科研費（課題番号16K13489）の助成を受けました。

文献

- Grandin, T. (1995). *Thinking in pictures*. カニングハム久子（訳）（1997）. 自閉症の才能開発. 学習研究社.
- 萩原徹也（2020）. 想起の体験様式の多様性からみた自閉スペクトラムとその辺縁. 内海健, 清水光恵, 鈴木國文編著 発達障害の精神病理Ⅱ. 星和書店. pp.82-107.
- 東田直樹（2010/2016）. 自閉症の僕が跳びはねる理由2. 角川文庫
- Kanner, L. (1943). Autistic disturbances of affective contact. *Nervous Child*, 2, 217-250. 十亀史郎, 斎藤聡明, 岩本憲（訳）（1978）. 情動的交流の自閉的障害. 幼児自閉症の研究, 10-55, 黎明書房.
- 川部哲也（2018）. 自閉症スペクトラムにおける自伝的記憶についての臨床心理学の一試論—東田直樹の体験記述分析—. 大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科心理臨床センター紀要, 11, 11-17.
- 川部哲也（2020）. 自閉症スペクトラムにおける優れた記憶についての予備的検討—大学生の「優れた記憶」の特徴—. 大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科心理臨床センター紀要, 13, 7-14.
- 木下康仁（2003）. グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い. 弘文堂.
- 松本卓也（2019）. 第2章 精神病理学／精神分析：世界体験を通して理解する自閉症. 野尻英一, 高瀬堅吉, 松本卓也編著 <自閉症学>のすすめ. ミネルヴァ書房. pp.29-55.
- 中島義道（1996）. 「時間」を哲学する. 講談社現代新書.
- 大森莊蔵（1992）. 時間と自我. 青土社.
- Proust, M. (1913). *A la recherche du temps perdu*. Paris: Bernard Grasset. 鈴木道彦（訳）（1996）. 失われた時を求めて1 第一篇 スワン家の方へⅠ. 集英社.
- 清水光恵（2020）. スクラップ置き場と私—自閉スペクトラム症の患者は過去をどのように想起してい

るか．内海健，清水光恵，鈴木國文編著 発達障害の精神病理Ⅱ．星和書店．pp.108-124．

杉山登志郎（2011）．杉山登志郎著作集1 自閉症の精神病理と治療．日本評論社．

（2021年1月26日受稿，2021年1月30日受理）